群像新人文学賞優秀賞　受賞の言葉

松永K三蔵

内容は疾うに忘れてしまったが、私は協力業者の担当とふたり、戸外で立たされ、延々一時間あまり、客の男からドヤしつけられている最中に、この作品を着想した。

作品はもちろん、自分の頭ン中だけでなく、人と会い、物に触れて着想を得たり、テーマを与えられたりするわけで、これまでも私はいろいろ書き散らかしてきたが、どの作品も、コレはあれ出会いが無ければ書けなかったなぁ、といつもその必然を思う。

しかし最近はそれがサカサマで、誰かと出会うことがあると、この人は俺に何を書かせてくれるのだろうと思うようになってきた。そしてそれは、人間でないこともある。

この作品は、私が部屋で書く時にはいつも、ベッドの上からずっと私のことを見ている、四足歩行のお前に書かせて貰った。ある種の不条理劇として書いたヘンテコ小説だが、それが拾われ、優秀賞にとっていただけるとは――。

スーパーで見るような買い物カゴに入れられ、伊丹空港に送られてきた赤ちゃんだったお前に、カッチカチのジャーキーをやったことは、今でも反省している。

下世話な話で申し訳ないが、いくらか賞金もいただけるらしい。果たして、それのどれだけが私の手元に残るのかは分からないが、その一〇〇分の一くらいは、お前の取り分を主張する犬利があるはずだ。きっとある。そうしたら今度は高級スーパーで、桃色につやつや光るササミ肉を買って、腹を壊さぬ程度に、たらふく食わせてやるからな。